



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	小学生における漢字の読字困難のリスク要因に関する研究：ひらがなの読み書きスキル及び認知スキルとの関連に基づく検討(論文要旨)
Author(s)	中,知華穂
Citation	
Issue Date	2017-03-23
URL	http://hdl.handle.net/2309/147693
Publisher	
Rights	

氏 名 : 中 知華穂
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第290号
学位授与年月日 : 平成29年3月23日
学位授与の要件 : 学位規則第4条第1項該当 課程博士
学位論文名 : 小学生における漢字の読字困難のリスク要因に関する研究
—ひらがなの読み書きスキル及び認知スキルとの関連に基づく検討—
論文審査委員 : (主査) 教授 小池 敏英
(副査) 教授 千田 洋幸 教授 北島 善夫
教授 澤 隆史 教授 葉石 光一

学位論文要旨

インクルーシブ教育の発展に伴い、通常学級における学習面の困難に対する早期予防的支援の必要性が指摘されている。特に、漢字の読みは教科学習全般で求められる力である。漢字の読み困難の特徴やリスク要因に関する研究は、従来 LD (Learning Disorders) 児を対象に行われており、通常学級における漢字の読字困難児を対象とした研究は少ない。これより、通常学級における漢字読字困難のリスク要因を明らかにする研究が必要であろう。そこで本論文は、通常学級に在籍する小学生の漢字の読字困難のリスク要因について検討を行った。

第1章では、LD 児を含めた読み困難を有する児童への教育的な支援の必要性を論じた。その上で通常学級における読み困難児の特徴やその背景となるリスク要因を明らかにすることは、教育的支援の有効な情報となることを指摘し、小学生における漢字読字困難のリスク要因を明らかにすることを目的として述べた。

第2章では、小学2年生 3437 名を対象に漢字読字困難のリスク要因を検討するため、漢字読字テスト及び基礎スキルテスト (特殊音節テスト、単語連鎖テスト)、言語性短期記憶テストを行った。その結果、小学2年生の漢字読字困難は、特殊音節やひらがな単語の流暢な読みの困難、言語性短期記憶の不全の重複がリスク要因となって生じることを指摘できた。

第3章では、小学2~6年生を 4519 名対象に漢字読字困難のリスク要因の発達的な変化を検討した。基礎スキルテストに加え、認知スキルテストとして言語性短期記憶テスト、言語性ワーキングメモリテスト、視覚性短期記憶テストを行った。小学校低学年の漢字読字困難は、特殊音節の未習得、次いでひらがな単語の流暢な読みの困難がリスク要因となり生じることが明らかとなった。また、小学校高学年では、言語性記憶の不全、次いでひらがな単語の流暢な読みの困難がリスク要因となることが明らかとなった。以上より低学年から高学年にかけてリスク要因が発達的に変化することを指摘でき、各学年のリスク要因に対応した支援が漢字読字困難の軽減につながることを推測された。支援にあつたては、ある時期に評価したリスク要因が、どの程度その後の漢字読み困を予測できるのか探る必要がある。そこで第4章では小学2年生 1720 名を対象に、漢字読字困難の予測的リスク要因について縦断的に検討した。その結果、小学2年生3学期の漢

字読字困難を予測するリスク要因は、1学期の特殊音節テスト、単語連鎖テスト、言語性短期記憶テストの低成績の重複であった。これより、小学2年生の1学期の時点でリスク要因の重複を避けることは、漢字読字困難の早期予防的支援につながる可能性を指摘できた。

これまでの章では、漢字読字困難児を漢字読字テストのパーセンタイル値により評価した。しかしながら、パーセンタイル値は同一年齢集団における位置であり、評価された者がLD児と類似した読字困難の特徴を示すかは不明であった。そこで第5章では、読字障害児16名を対象に、通常学級の漢字読字困難児との共通点や差異について検討した。その結果、対象とした事例の7割が通常学級の漢字読字困難（漢字読字テストが下位10パーセンタイルの者）に相当した。対象事例は、言語性記憶とひらがなの流暢な読みに困難を示す者（区分Ⅰ）と、言語性記憶に弱さはないが、ひらがなの流暢な読みに弱さがある者（区分Ⅱ-1）の2つのリスク要因のタイプに分類された。これより、通常学級において区分Ⅰや区分Ⅱ-1の成績に該当する漢字読字困難児は、読字障害児に類似した特徴を示すことが予想された。また、区分Ⅰ、区分Ⅱ-1に分類されても、漢字読字困難を示さない事例もあり、その者は困難を示す者と比較して有意味語の音読時間が有意に短かった。これより、支援などによる、ひらがな単語の流暢な読みの機能改善により漢字読字困難を回避できる可能性が示唆された。

第6章では、これまでの漢字読字困難のリスク要因に関する検討を踏まえ小学2年生17名を対象に漢字読字困難の支援効果について検討した。その際、単語連鎖テストの低成績群と非低成績者群に分けて支援効果を検証した。その結果、両群ともプレテストと比較して介入後の保持テスト成績の向上を認めた。また、未指導漢字テストの成績と保持テスト成績の正答率の比較から、リスク要因を複数有している低成績群は、長期的な漢字単語の読みの保持に弱さがあることを指摘できた。

以上の検討を踏まえ、第7章の総合考察では、漢字読字困難とリスク要因の関係を、読字障害に関する先行研究に基づき整理した。また各リスク要因の習得や発達に関して概観し、漢字読字困難は、リスク要因となる各スキルの、発達の偏りまたは、読字障害などにより生じる可能性を論じた。その上で、通常学級における漢字読字困難のリスク要因を明らかにすることは、支援のために必要な情報を明瞭にし、更にリスク要因に対応した支援は、漢字読字困難の軽減や予防につながることを指摘した。